

## このひと



カトリック大阪大司教区「子どもの里」館長  
しょう ほとも こ  
**荘 保 共 子さん**

### 生まれながらに不利を背負わされる子どもたち

「デメキン!」。荘保共子さんは、子どもたちから親しみをこめてそう呼ばれている。大阪市西成区、釜ヶ崎のど真ん中に位置する「子どもの里」を開いて35年が過ぎた。

日雇い労働者のまちとして知られる釜ヶ崎。しかしこのまちにもさまざまな家庭があり、子どもたちが生まれ育っている。日雇いをはじめとする不安定な仕事に就いている親が多く、ひとり親家庭は半数を占める。親の貧困や暴力、病気は子どもの生活にも影を落とす。貧しいことや病気が悪いのではない。追いつめられ、希望を持てない親たちの“荒れ”が時に子どもたちを傷つけてしまうのだ。「生まれたときから不利を背負わされる子どもに、日本社会は自助努力を迫るんです」と荘保さんは話す。

### 傷つけられても親を許し、求める子ども

たとえば、家出を繰り返してはシンナーを吸っていた2人の少女がいた。荘保さんは彼女たちを探し出しては家に連れ戻していた。「ある時、2人がすごい勢いで泣き出してね。なんとか話を聞くと、1人は実の父親からずっと性虐待を受けていたと。さらにそれを見た母親に出刃包丁で“出て行け”と脅されたと言うんですよ。もう1人は母子家庭の子で、小学5年生の時に管理人さんから性暴力を受けた。隣の部屋にいたお母さんに助けを求めたのに助けてくれなかつた。学校に行けば”おまえの母ちゃん、パンパンや”と言われていじめられるから、学校なんて行きたくなかったと言うんです」

涙ながらに話し終えた彼女は、「それでも私のお母ちゃんや。私はお母ちゃんが大好きやねん!」と叫ぶと、さらに大声で泣いた。

どんなに傷つけられても親を許し「好きやねん!」と叫ぶ子ども、親を求める強い気持ちに心が揺さぶられた。

## 子どもたちから学び、

## 子どもたちとともに生きる



「それが私の原点。家族統合にこだわる理由です」

### すべては子どもたちから学んだ

以来、荘保さんは「家出してもかめへん。でも家出先是“里”やで」と子どもたちに伝えている。親たちとも密にコミュニケーションをとり、サポートをする。

釜ヶ崎との出会いは、大学卒業後のボランティア活動だった。獣医だった父の赴任先であるアフリカやインドを訪れていたこともあり、混沌とした釜ヶ崎を自然に受け入れられた。何より子どもたちの目の輝きに引き込まれ、「この子たちと生きていきたい」と強く思った。両親の猛反対を押し切り、25歳で家出をして釜ヶ崎へ移り住んだ。

「日雇いもドヤもアブレも知らなかった私に、幼稚園の子が教えてくれた。ありのままの私でいいんだということも。釜ヶ崎に来て、私は自分が被っていた衣を何枚も脱いで、素の自分でいる気持ちよさを知ったんですよ」

遊び場として1977年に学童保育「子どもの広場」になり、1996年に大阪市の「子どもの家事業」に移行。遊び場だけでなく2000年に里親の認定を受け、2001年には大阪市家庭養護察に指定される。2010年からは小規模住宅型児童養育事業「子どもの里ファミリーホーム」に移行し、子どもたちの生活の場としても明確に位置づけられた。

「あかちゃんから高校生まで、障がいのある子も一緒に育つ。しんどい時はいつでも来れば、話を聞いてくれる人がいる。今はうちみたいな遊びと学びと暮らしが一つになった場所が全国的に必要なんじゃないでしょうか」

カトリック大阪大司教区「子どもの里」

TEL・FAX:06-6645-7778

<http://www.k5.dion.ne.jp/~sato/>